

このような小さな区画で、本当に稲作が行われたか疑問も残ります。類例が群馬県で多数発見されていることから、水田と評価して問題ないと思われます。ただし、土壌を分析しても、稲作の明確な痕跡は確認できませんでした。このことから、耕作があまり行われない段階で、土石流に覆われた可能性が高いと考えられます。また、田面からは当時の鍬（身の部分）が出土しました。これは水田耕作に利用された道具と考えられ、当時の人々が、耕作を行っていた揺るがぬ証といえます。



鍬の身

復元推定長：60 cm

3 平安時代

平安時代（9世紀）の遺物は、窯で焼かれた須恵器が出土しました。この中に、1点、漆で「嘉川」と書かれたものが見つかりました。当時、地名に縁起の良い文字があてられていることを考えると、これは「ヨカワ」と読むことができ、「余川」という地名が平安時代まで遡る可能性が高くなってきました。発掘資料から平安時代まで地名を遡れた事例は県内でも数例しかなく、貴重な発見といえます。



「嘉川」（ヨカワ）と漆書きされた須恵器

4 室町～戦国時代

直江兼続が活躍する少し前の時代（15～16世紀）には、余川に集落が築かれていました。当時の建物の柱穴が1400基ほど見つかりました。しかし、これらの柱穴から構成される建物が、一時期に築かれたわけではなく、建物を何度も建て替えた結果の累積と考えられます。室町～戦国時代の集落遺跡は、南魚沼地域ではほとんど発掘されておらず、貴重な調査事例といえます。

この集落に住んだ人々は、様々な道具を残しました。お茶道具の天目茶碗や、茶を挽く茶臼の存在は、茶を嗜む階層の人々が暮らしていたことを意味します。また、飯事に利用された精巧なミニチュア土器は、他の遺跡ではあまり見られない遺物です。日常生活に直結しない遺物が目立つことが特徴的といえます。また、「温石」（石を熱して木箱に入れる携帯用の暖具）には「忠葉」という達筆な文字が刻まれていました。人名か地名を意味すると思われますが、文字をしっかりと理解した識字層が存在したことを示す資料といえます。これらから、当地には地域でも中心的な集落が存在したことをうかがい知ることができます。



「忠葉」と刻まれた温石



中国から輸入された青磁・白磁・青花



愛知県～岐阜県で焼かれた瀬戸焼・美濃焼